『泰東日報』からみた大連マスコミの一側面

李　　青

はじめに

日露戦争の結果、大連地区における統治は日本がロシアに取って代わり、その後日本の敗戦まで40年間にわたって君臨するようになった。

1905年12月22日、日本と当時の清国間で満洲戦後条約、いわゆる『満洲に関スル条約』（中国では『中日会議東三省事宜正約』及附約と言う）を北京で締結した。主な内容は清国政府が『ポーツマス条約』（1905年９月５日日露講和条約）の中国東北三省に関する内容を受け入れることだった。すなわち、租借地大連旅順及び長春から旅順までの鉄道とその沿線におけるすべての権利を日本に譲ることにしたのである。なお、同鉄道を守備するための日本陸軍の常駐権と沿線鉱山の採掘権保障、営口・安東・奉天における日本人居留地の設置の許可などの内容が盛り込まれ、日本の満洲経営の基礎となった。

行政においても、租借地大連の統治を着々と整えはじめた。1906年5月に遼陽にあった日本関東総督府を旅順に移転した。同年7月に日本政府196号勅令『関東都督府官制』の頒布によって、関東総督府を廃止し、関東都督府を立ち上げた。一方、政府より現物出資１億円、民間より1億円の資金を集め、南満州鉄道株式会社が特殊法人として設立された。通称「満鉄」、いわゆる国策会社である。「満鉄」は鉄道関係や経済、文化と多岐にわたる植民地経営に積極的に関わる。第二次世界大戦前の日本で最大級の会社であったと言われている。

本稿では、上記の情勢の下、植民地経営をした大連において、文化事業の中でもっとも重要視される新聞事情の実態について、中国語紙『泰東日報』から分析を試みてみたい。

一　『泰東日報』の創刊

大連における新聞産業の歴史は日本が大連を統治するより以前の時代に遡ることができる。『泰東日報』が創刊される前に大連にはすでに10種類の新聞が存在した。[1] はじめて創刊された新聞は、1905年10月25日に創刊された日本語紙の『遼東新報』である。

『泰東日報』創刊は、日本が大連で施政してから、最初の中国語紙である。1907年に山東出身の大連華商工議会会長劉肇億（1851-1936）が宝くじを発売し、財をなした。1908年３月に副会長郭学純などが発起人として、中国語新聞を創刊するために中国人商業会の有志から広く資金を蒐集した。日本人の友人である『遼東新報』の中国語コラムを担当する編集者金子平吉（字、雪齋）を招聘し、1908年11月３日に『泰東日報』を発刊した。

創刊に携わった中国人商工議会業者団体である大連公議会理事として活躍していた曲模亭が、『泰東日報』創刊25周年を記念する回想文を『泰東日報』に寄稿している。1934年９月１日の『泰東日報』の第一面に「本誌誕生追記」（中国語タイトル「本報誕生追記」）という題で掲載された。曲模亭は『泰東日報』の主要編輯人として大きな役割を果たした一人でもある。新聞を立ち上げる経緯について曲模亭は以下のように回想している（本稿における『泰東日報』の引用の和訳はいずれも筆者によるものである。）

> 諸君の活躍を称えると同時に、我々は高い志をもって、経営に苦心される社長の金子雪齋先生と大連華商会議会の劉志恒と郭精義両会長のことを忘れてはいけません。劉郭両公は雪齋翁が中国語に精通し、新聞業務にも長けていることを高く評価していました。一方、雪齋翁は私と意気投合し共に地方情勢に詳しく、互いに信頼し、助け合っていたのです。発刊する前に、役員会議を開きました。劉郭両公は本会のリーダーであり、商工会において、それぞれ覇業をなしていました。会合上で援助することを決定しました。二人は役職を持たず、雪齋翁を編集長に、私を

(1) 張　欣「日本植民統治時期大連的『泰東日報』」（『大連城市歴史文化研究』大連城市歴史文化研究研究所．2017年）、131頁。

泰東日報

本報創刊廿五周年紀念

創刊紀念感言

本報誕生追記

祝泰東日報廿五週年紀念

在天津 傅立魚

祝二十五週紀念

邵慎亭

祝詞

丁鑑修

創辦本報之前社長
故金子雪齋先生

創刊二十五週紀念

滿洲國政府

參議府

參議 張景惠
參議 袁金鎧
參議 貴福
參議 筑紫熊七
參議 田邊治通
參議 增田繼
參議 矢田七太郎
參議 志賀熙
參議 胡嗣瑗
秘書局長 荒井靜雄

國務院

國務總理兼交通部大臣 鄭孝胥
民政部大臣 臧式毅
外交部大臣 謝介石
軍政部大臣 張景惠
財政部大臣 熙洽
實業部大臣 張燕卿
交通部大臣 丁鑑修
司法部大臣 馮涵清
總務廳長官 齊燮特色本至勒
總務廳長官 遠藤柳作

新京市政公署

市長 金壁東
總務處長 橋口勇九郎
行政處長 董鍚

(二) Oriental Daily News No. 6.4 THE TAI TONG JIH PAO Taiwan Friday January 10 1913 三月十一日 明治四十五年 大正二年 第六百四十八號

泰東日報

臺灣新聞社 臺北月十二日 日刊明治四十四年一月十日 西曆一千九百十二年(歲在壬子)

第六百四十八號

本社舊設在大稻埕永樂町 今移臺北市表町二丁目八番地

論說

增將軍果廢東督之任乎

（東京電報）

[illegible]

譯說

▲英法對於土國之交涉

英法兩國對巴克達鐵路所示密約之結果遂力使英國德國近來所由南國向土耳其政府要求

▲中西哥革命軍之敗北

墨西哥革命軍於日本政府列于英國[illegible]十八名英人[illegible]

▲英皇於議院降詔如是

英國議院於西曆初六日行開會式皇說[illegible]

▲俄官國見疫猖獗原因

俄羅斯近來疫猖獗[illegible]

▲朝鮮壓制日商之原因

朝鮮[illegible]

來稿

鼠疫病因療法論（續）

下野生

[illegible]

雜錄

上民政部書

丁福保

[illegible]

京津之防疫

[illegible]

漢口能市風 奉始未

[illegible]

1928. 11. 3

THE TAITUNG JIHPAO

中華民國十七年十一月三日

第六千三百六號

本報二十週年祝詞

本社之創立與本領

助手にしたのです。これは新聞創刊の数日前の決議でした。当時のことは未だに前日のように思い出されます。

ここから大連の華商会議会の劉志恒と郭精義両会長の尽力及び中国商人たちの資金援助をバックアップとしていたことを窺い知ることができる。なお、新聞を主催する人を中国人つまり身内にせず、わざわざ日本人を起用した目的について、曲模亭は以下のように言っている。

本紙は風気を開通し、庶民を啓発するために泰東日報を創刊しました。日露戦争が決着した今日、日本がここの土地を統治し、政治と教育を行っています。様々な事業が再建されるようになりました。大連は商港の

要であり、華商が日を追って増えつつあります。当時は日本語の新聞はすでに発刊していたのに対して、中国語新聞は欠如していました。華商会議会の劉志恒と郭精義両会長は、一般の華商が日本語の新聞を読める者が少ないことを憂慮し、華商会議会の劉と郭両会長は時勢潮流に順応し、中国語新聞の創設を図りました。このようなことは未経験のため、新聞経営者を獲得することが困難だったのです。当時、雪齋翁は漢学の大家であり、遼東新報の漢文コラムを編集していたので、志を共にできました。もっとも適任者であろうと言えるのです。私は当時、大連の公学堂で教職の任にあたり、雪齋翁と文字交流がありました。華商会議会の幹部とも平素杯を交わし歓談していました。新聞を創刊することは時勢潮流に順応し、社会を導くことです。中日双方は幾度も会談し、華商が資金集めの議を定め、発刊の手続きを進めたのです。

初期の経営に関わった曲模亭の回想は当時の様子が浮き彫りにしている。華商会議会の劉志恒会長と郭精義副会長が財を惜しまず中国語新聞を創刊した熱意は、中国人社会を啓蒙する使命感から情熱を燃やしていたのだと感じ取ることができる。なお、日本人金子雪齋を起用した思惑は、中国語や中国社会に精通し、新聞編集に携わった経歴からだけではなく、それ以外にも苦心されたこともあっただろうと推測できる。当時の大連は日本人の統治下に置かれ、文化事業も勢力が伸び、金子雪齋の人脈と社会における地位を利用し、各官庁に融通を利かせることも考慮されているにちがいない。

金子平吉（1864-1925）[2]は福井県生まれ、字は雪齋である。著名な漢学者だった。幼少時から中国の経典を好み、17歳に東京の「双柱精舎」に入り、儒学に没頭した。学習中に中国の儒学者王治本の教えを受け、漢学の造詣を一層深めた。1894年、日清戦争勃発後に、従軍通訳を務めた。日露戦争勃発後も再び通訳として従軍し、初めて遼東に入った。以後、台湾に渡り、総督府で奉職した。数年後日本に戻り、自ら振東学社を興し青年子弟の教育に力を注ぎ、大陸青年会を組織して会長となった。

1906年に大連の『遼東新報』に入社し、『遼東新報』の漢文コラムを主宰

(2) 前掲書、136頁。

した。1908年に『泰東日報』の創刊に伴って移籍したが、1925年に病死した。『泰東日報』の創刊時から前期の発展まで多大な功績を残している。

二　『泰東日報』の初期経営理念と初代社長金子雪齋

初代社長兼編集長の金子雪齋は、『泰東日報』の経営方針に大きな影響を及ぼした極めて重要な人物である。金子は『泰東日報』に移籍してから、中国人の有志者や急進的な思想の持ち主を積極的に編集に起用した。これは彼の主義主張と経営方針から垣間見ることができる。1913年傳立魚（1882-1945、後述）に出会って、編集長として起用することにより、『泰東日報』は全盛期と言われるほど好調であった。

金子雪齋と編集長傳立魚はコンビとして、『泰東日報』の初期の好景気を作り出した。

『泰東日報』は1926年８月28日、金子雪齋の一周忌にあたり、傳立魚が「嗚呼金子雪齋先生」という題で、追悼文を掲載した。金子雪齋の人物像と作風がリアルに描かれている。

> 先生は神清気爽して、白鬆を胸元に垂らしている。（中略）中国の古典に造詣が深く、中国古代の聖人、賢人を心から崇拝している。中国の富強を切望していた。（中略）先生の給与は少ないにもかかわらず、他人に対して気前が良い。門下生が要望があれば、惜しまずに助け船を出す。先生は生活が布服を身にまとい、一日二食とも麦ご飯しか食べず、客をもてなすときも同じ品しか出さない。（中略）私は福島と中村両総督（福島安正総督と中村覚総督を指している。筆者註）が尋ねに来られたのを目撃した。普通の招待客を接待することと同じである。婦人児童または部下使用人に対しても礼を持って接し、いつも和気藹々であった。
>
> （『泰東日報』1926年８月28日）

金子は青年期から儒学の文化の薫陶を受け、謙虚さを尊び、名誉利益を気にせず、気骨を重んじ、蓄財を軽蔑する精神を身につけた。中国人傳立魚の回想から金子雪齋の人物像はより立体的になってきた。また社内での日常は傳立魚を信頼して全てを任せ、過剰な干渉はなかったため、進歩的な思想の

持ち主である傅立魚は自在に新聞の編集ができた。以下のように傅立魚が証言している。

> 私が泰東日報にいた頃、先生はもっぱら私を信用した。おおよそ編集部の人事は悉く私に任せた。まったく干渉しなかった。自ずから責任を果たした。（『泰東日報』1926年8月28日）

では、『泰東日報』はどのような編集方針をもっていたのか。経営理念は如何なるものだったのか。1928年11月3日の『泰東日報』20周年の社説から分析してみよう。

『泰東日報』一面に同人たちから2篇の社説が掲載されている。「本社の創立と本領」は、初代社長の金子雪齋翁の言葉を引用して、以下のように述べている。「我が社の所有権は如何なる者に存在せず、諸天にも存在せず、我が社の責任者たる者はこれをこころに刻み、人道主義的な発展に邁進すべきだ」と金子の経営理念とでも読み取れる一文である。

「本報二十週年祝詞」の中には、新聞を経営する精神と『泰東日報』の信条をみることができる。

> 新聞はニュースを伝達する利器であるだけでなく、社会を啓蒙し、文化を宣伝する道具でもある。前者は手段であり、後者は本務である。故に新聞は天職として、まず第一に、物事の扱いが公正で偏らず、正しい道を守って他に迎合しない。真理正義をもって、人道公明の路を邁進する。第二に、何ものをも恐れず、勇敢に前進し、強大で不屈、富を得ても、心を変えてはいけない。自分を犠牲にしても公理を守る。第三に、全人類の幸福を謀り、お釈迦様とイエス様のご慈悲をもって、孔子孟子の衆生救済の心をもつ。一地方または一国家にばかり拘る利己的なことをせず、全人類の利益を犠牲にしてはいけない。

さらに社説は使命についても言及している。東アジアの文化を融和し、中日両国民の連携をし、共生共栄を謀り、東北三千万人を啓発し、安全的な共存を謀る。今後の抱負についても、これまでに先任たちが切り開いた道と方

針を守ってゆくことを誓っている。

『泰東日報』の経営方針には、社長の金子雪齋の思想が深く投影されていると考えられる。王子平は「金子平吉其人其事」[3]によると“大陸主義”を信奉する金子は、「“大陸主義”の推進方法と手段において、金子は日本政府と重大な食い違いが存在している。まずは、金子は教育を先行すべきだと考えている。次に“王道”を宣伝し、日中関係を親善、融和してから、東アジア民族の提携と結合が実現する」と分析している。「社会を啓蒙」し、慈悲をもって「衆生救済」、「近隣融和」を求めた金子理念は、進歩的で若い中国人、とりわけ大連の工商会に好印象を与え、共鳴を呼んだことは間違いないだろう。

金子雪齋が社長として運営していた1908年から1925年にかけての足かけ8年間の間は、上記の新聞引用または掲載記事から、社風は極めて開放的だったことが分かる。中国人の編集長である傅立魚の編集方針を全面的に支持し、当時においては、進歩的な記事を積極的に掲載し、社会の不平不平等を新聞の宣伝力をもって、弱者のために声を上げてきた。この時期の『泰東日報』に対する評価も極めて高いことは諸説から読み取ることができる。

三　『泰東日報』の中国人編輯者の活躍

『泰東日報』は初代社長の金子雪齋を含めて、終刊まで歴任した6人の社長はいずれも日本人であった。しかし、彼らは編集過程において、有能な中国人知識人を多く採用したことが新聞の諸記事から分かる。中国人編集長として名を連ねているのは傅立魚をはじめ、李子民、蔣模庵、李永蕃、趙恂九、劉志枕（劉諄）である。梁德学の研究[4]によると、『泰東日報』に関わった大連本社の社員は101人にのぼる。編輯人として、多くの中国人の名前は確認ができた。

初代社長の金子雪齋時代に活躍した編集長傅立魚に筆墨を費やしたい。

傅立魚は金子との出会いは奇縁のようなものだった。1913年に傅立魚は“笠漁”と言うペンネームで『泰東日報』に寄稿した。明晰な論点と優れた

---

(3)　王子平「金子平吉其人其事」（大連図書館トップページ、大図出版物 WEB 論文より）、2頁。
(4)　梁德學「灰暗處的“寄居者”：“關東州”日人報紙中的中國報人群體—以大連《泰東日報》為中心（1908-1947）」（《海報鉤沉》2019 NO.08）、83頁。

文彩はたちまち金子の目に止まり、友人を介して面会し、泰東日報に傳立魚を採用する件はスピーディーに決まった。

傳立魚[5]は安徽省生まれ。清末の秀才、1900年安徽大学堂を中退してから、日本の明治大学で法律を学んだ。日本滞在中に革命家の孫文が創立した同盟会に参加した。資本主義民主主義思想に傾倒した。1912年天津で『新春周報』を創刊し、袁世凱[6]批判の社説を掲載したところ、指名手配され、追われる身となり、翌年に大連に逃れた。

傳立魚は入社時に社長の金子雪齋と三つの約束[7]をしている。

一つ目に、『泰東日報』は中国語紙なので、読者はほとんど中国人である。中国人の立場から発言すること。二つ目に、もしも中日に紛争が起こった場合は、真理と正義を尊重し、平等に対処すること。三つ目に、袁世凱を討伐する機会があれば、直ちに辞職すること。金子社長は傳立魚の三つの要望を受け入れた。日本人社長との信頼関係をバックアップにした傳立魚は、編集長として、因習にとらわれず、『泰東日報』の歴史に栄光なる頁を残した。

15年間の編集長生活の中で傳立魚は価値のある莫大な「社論」（社説）を残している。社説は「西河」というペンネームで掲載されている。論点は鋭く、国内外の問題を的確かつ迅速にキャッチし、ロシア革命や中国の五・四運動関連のニュースについて並々ならぬ反応をしている点が特筆できる。大連内部に発生する諸問題を新聞の力を発揮しながら、弱者のために声を上げ続けた。

1920年５月１日の一面には、「西河」署名の社説「果無差別待遇乎　満鉄対汽車華人乗客差別」（「本当に差別が存在しないのか？満鉄が華人乗客を差別について」）が掲載された。南満州鉄道株式会社が中日の乗客を差別することを厳しく糾弾し、今後過ちを正すよう強く要望した。

1920年３月に金州三十里堡で日本人資本家に土地3000畝（ムー）[8]を強制買収される事件が起こった。不服な中国人農民が『泰東日報』に告発し、阻止

---

(5)　前掲書、同注(1)、136頁。

(6)　袁世凱（1859-1916）。中華民国初代大統領（1913-1915）。帝政を復辟しようとしていたが、反袁運動で失敗に終わる。

(7)　李振遠　主編『長夜・曙光―植民統治時期大連的文化芸術』（大連出版社1999年）、53頁。

(8)　畝は地積単位のこと。１畝は１ヘクタールの15分の１。

することを依頼した。傳立魚は自ら解決に出向き、行動をもって、農民たちを支援した。

なお、傳立魚は共産党の活動に同情的であり、進歩的な思想の持ち主と連携を取り、幾度となく苦境に陥った革命活動を行った共産党員を救出した。

傳立魚は常に辛口の持論で世相を評論し、時には日本の植民地支配に対抗する言動まで見受けられた。

1928年に東三省攪乱を目的として張学良易幟を擁護し、政治的秘密結社を組織、種種の陰謀を画策した罪名で逮捕され、死刑を言い渡された。この後、各界からの圧力で、釈放されたが、当局より大連から永遠に退去する処分を下された。

金子雪齋と傳立魚後の『泰東日報』であるが、二代目の服部真言は初代社長の金子に抜擢され、就任した。しばらくは金子の遺志を受け継ぎ、新聞は発展し続けていた。しかし、この後、中国人と日本人の職員の比率は徐々に日本人が多数を占めるようになった。

1931年の満州事変（中国では九・一八事変という）、1932年の満洲国建国、1937年の日中全面戦争を経て、新聞の性質は大きく変わり、日本の政治体制に迎合する傾向が顕著になっていく。戦時下において、独立した立場を保つことはもはや不可能だった。

四　『泰東日報』の歴史的意義

『泰東日報』は植民地大連においてもっとも歴史の長かった新聞である。明治以後日本は中国に積極的に拡張し、1945年の敗戦まで日本人経営の中国語新聞は19紙もあった。しかし、終戦まで存続したのはわずかに３紙しかなく、『泰東日報』はそのうちの一紙である。

不完全な統計によると[9]、日本植民地時代の大連においては、敗戦まで41種類の新聞があった。日本語が37紙、中国語は３紙、英語は１紙だった。1935年出版の『中国報紙指南』（『中国新聞ガイド』）大連にある新聞の発行部数は12万であり、中国全体では第六位を誇る高水準であったとある。

『泰東日報』は数少ない中国語紙として、唯一日本の敗戦まで発行を続け

(9)　前掲書、同注(4)、85頁。

てきた。初期の段階は前述のように自由な社風の下で、創作の幅が大きかった。変化が見られるのは日中全面戦争によって、言論の統制が敷かれる時期からである。中国語紙の『関東報』、『満洲報』を吸収し、合併し、勢力の拡大を謀った。この後、満洲国弘報協会に加入した。ゆえに『泰東日報』は以前と比べ、中国人編集者の政治的な地位が下落し、発言権が弱くなった。

上記の事実を受け、梁徳学は中国人新聞記者について以下のように指摘している[10]

> 日本に占領された領土の延長である関東州で多くの優秀な新聞記者が活躍していた。『泰東日報』社内にこのような人物がいたはずである。彼らは『泰東日報』に中国人新聞記者にある程度実践的な模範を示してくれた。それに、大部分の中国人は勤勉であり、どの時期の『泰東日報』を見ても、その専門性といっても、業務はハレベルだと言えよう。（中略）太平洋戦争勃発後に一部の論説は日本人によるものだったが、他はすべて中国人編集者によるものであった。彼らの社説は政治的な立場はどうであるのかはよそに置いておき、文字の技巧をみても、立脚点が高く、経典を引用し、しっかりと根拠を示している。中国文人の世を補佐することを自分の任である伝統的な精神がしっかり継承されている。力作ばかりであった。（略）残念ながら九・一八事変後、中国人編集者の原稿量が多いものの、操作された形跡が顕著で、次第に日本によって道具化されていく。

『泰東日報』でもう一つ重要なのは、文藝コラムの繁栄であろう。文藝コラム欄は中国人編集者や投稿者の才能が大いに発揮される場所である。早期の「游刊」、中期の「泰東雑俎」、「泰東日報・副張」と「芸苑」などは、中国らしい文藝コラムが読者を引きつけた。例えば、「哀情小説」、「学海新潮」、「閒情逸致」、「河魚天雁」、「温情郷語」、「照世明鏡」、「読者之声」などは中国文化に密着し、馴染みのある四字熟語やよく使われる文言ばかりで、親しみやすい。原稿は世間に広く公募していた。

---

(10) 前掲書、同注(9)、85-86頁。

1926・9・17

『泰東日報』に集まった一群の編輯者たちは才能があふれる人が多く、実に多彩だった。彼らはまた作家として、東北文壇で活躍した者が少なくない。例えば、趙恂九は新聞編集の傍ら、東北文壇においても、著名な言情小説家でもある。雑誌『麒麟』[11]の常連作家でもあった。

(11) 雑誌『麒麟』は1941年6月に満洲国新京（現在長春）に創刊した。前身は月刊『斯民』である。合計46期。

『泰東日報』は日本の租借地時代からスタートし、日本における大連への植民統治とともに歩んできた貴重な新聞紙である。満洲事変、満洲国建国、日中全面戦争、太平洋戦争などのような大きな歴史事件をはじめ、世間の移り変わり、世界の動きを迅速に文字をもって、報道してきた。為政者の政治的立場は如何なるものなのかは別にしても、歴史に刻むべき出来事の数々は彼らの筆によって永遠なる記録を残してくれた。初期のように、政治的な自由空間さえ与えておけば、中国人の若き編集者たちは自国文化を高揚し、民族の自負を持ち、外来の勢力に抵抗を試みていた。また、中後期に入ってから、中国人新聞記者の心なき体制に迎合する言論から植民地の悲哀が紙面からにじみ出るようになった。業務レベルや文化的な素養を概観するならば、『泰東日報』は中国近代新聞史に大きな業績を残してくれた。大連と東北地方ないし当時の中国の歴史を研究するには、格好な材料になるだろう。

[附記]

本学は2019年に『泰東日報』の一部分のマイクロフィルムを図書館に購入した。大連図書館・遼寧省図書館所蔵の原本からの複製によるマイクロフィルム版であり、中華全国図書館文献縮微中心から出版販売されている。本学に館蔵されているのは、1929年～1945年までの第40巻から120巻までである。残念ながら、『泰東日報』自体に欠号が多数あったり、または頁の破損がある。この新聞を研究するには、いささか不便をもたらすことは事実である。

いずれにせよ、本学所有の『泰東日報』は歴史研究者や文学研究者に日中近代史と文学の方面で、貴重な一次資料を提供してくれる。今後の研究に生かしたい。

筆者は本論を執筆する際に上記のマイクロフィルム版と中国社会科学院・国家図書館・国家档案局の「抗日戦争と近代中日関係文献データベース」（DVD版）も利用したことを付け加えておく。

（本学教授）